

キリストがいる切実な風景

高校時代の美術の先生がルオーに強い影響を受けた作品を描いていたこともあり、ルオーは最初に出会った西欧画家である。濃い青色の夜空に浮かぶ月、黒く太い線に縁取られた山々や樹々。ルオーは夜の画家という印象だった。その先生が描いた、月が照らす夜の風景画を形見で頂き、今も仕事場に掛けている。

今回、熊本県立美術館に展示されているパナソニック汐留ミュージアム所蔵のルオー作品は、47点の油彩画と水彩画、そして83点の版画である。キャンバスに描かれている油彩画は第1室の最初に展示してある美術学校時代の1点のみで、他の油彩画の支持体はすべて紙および厚紙。仕上がれば麻布で裏打ちし、木枠に

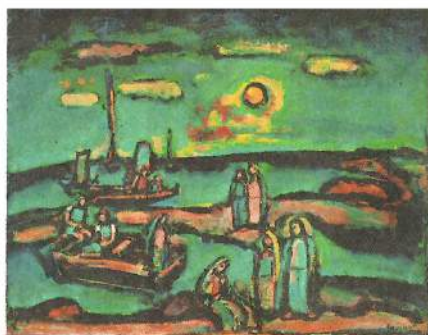
ルオーの油彩「古びた町外れにて 又は『台所』」の前に立つ筆者
＝熊本市中央区



◇あきた・たくみ 1952年鳥取市生まれ、東京芸大大学院修了。白百合会常任委員。熊本市在住。

「ジョルジュ・ルオー」展に寄せて

画家・崇城大教授 有田 巧



ジョルジュ・ルオー「キリストと漁夫たち」
1947年頃 パナソニック汐留ミュージアム所蔵

強く印象に残った作品が

張り込むが、描く時は机上に寝かせて描いていたようだ。アトリエで制作中の写真を見ると、制作途中の厚紙に描かれた作品が何枚も重なって平置きしてあり、その上から筆を入れている。初期は水彩画を多く手がけたこともあり、周りに鉛筆、パステル、インク等を置き、水彩などで描き始め、油絵の具を塗ったり削ったりして仕上げていた。水彩はもちろんのこと、厚紙もイーゼルに立てては描きづらかったのだらう。15歳で弟子入りしたステンドグラスの制作方法に慣れ親しんだことも要因のひとつだったと思われる。

ある。「キリストと漁夫たち」と並んで掛かっている「避難する人々（エクスドゥス）」の2点である。旧約聖書の「出エジプト記」から題を取った「避難する人々」は、もうすぐ陽が落ちる道をあてどなく、希望もなく歩き続ける家族の姿だ。「キリストと漁夫たち」は、海岸風景の中に布教するかの静かにたたずむキリスト、漁から帰ってきた漁夫たち、それを迎える女たちが澄んだ濃青色の中に描かれている。これらの2点は、今、中東から地中海を小舟でギリシャの海岸を目指している多くの難民の、追いつめられた人たちの生への脱出行と重なって見える。

「古びた町外れにて 又は『台所』」は小林秀雄が一度見て忘れられないほどの感銘を受けた作品だといいますが、それは特定の聖書の場面ではなく、使い込んだ鍋が火にかかっている民家の台所の一角に座るキリストを描いたものである。キリストは、存在を消すように、静かに耳を澄まししている。同じように私も忘れられないルオーがある。ブリヂストン美術館所蔵「郊外のキリスト」である。郊外（お

そらく、パリの）の工場街の外れの、淋しい道に立つ（現れた）キリストと子供。初めてこの作品を見たとき、郊外のキリストという画面と現実の黒い煙突の立つ工場街の外れに現れたキリストに意表をつかれた。きびしい生きるための労働を終えた工場街を照らす寒々とした月。その月に照らされた暗い夜道を何度か曲がれば、道端に立っているキリストに出会えそうに思えた。

ルオーは激しい筆運びや分厚く塗り込められた油絵の具のせいだ。また、美術学校でマチスやマルケ、マーンギャン、後のフォービストたちと同じクラスだったせいか、野獣派、また表現派の仲間に入れられることがあるが、そういう美術運動にはくみしていない。影響を受けたとすれば小説家のJ・K・ユイスマンスやレオン・プロワまた、宗教学者たちとの交流からである。

水彩や油彩、版画で表されたルオーのキリスト（ピエロや娼婦であっても）は、常に切実だ。その切実な風景は世界は、作品の前に立つてこそ感じ、理解できるものである。

※「ジョルジュ・ルオー」展は23日まで、熊本市中央区二の丸の県立美術館本館で。